

小論文問題用紙

問題 次の文章を読んで、「言葉にされないために気づかれないでいる物語を見つけ出」すということについて、あなたの考えを述べなさい。字数は七〇〇字以上八〇〇字以下とします。

「こつちへいこう、こういうふうの世界を広げてゆこう」という、物語自身が持っている力に導かれなないと小説は書けないと思います。一人の作家の頭のなかで考えることのできる程度はたかだか知れていますので、作家が先頭に立って登場人物たちをぐいぐい引つ張って書くような小説は、私はむしろおもしろくないと思っています。自分の思いを超えた、予想もしない何かに助けてもらわないと、小説は書けません。

ですから私はときどき、小説を書きながら、書き手であるはずの自分自身がいちばん後ろを追いかけているな、と感じます。『博士の愛した数式』^注でも、私よりも前に博士や家政婦さんやルート君がいる。自分よりも前にすでに完全数や友愛数がある。そういうすでにあるものの後を一所懸命追いかけて行って、振り返ったときに、自分の足跡が小説になっているという感じですよ。

自分が全能の神になって登場人物を操り人形のように操っていたのでは、自分の頭のなかに納まる話しかできません。これからどうしたらいいのか、この次の場面、この次の一行をどうしたらいいのかと、自分の頭のなかだけであてもないこうでもないと考えはじめると、どんどん視野が狭せまくなって行き詰まってしまう。自分の思いを突き抜けて、予想もしなかったようなところへ小説を運んでいってくれるのは、自分以外の何かであるんじゃないか。そうすると、小説家も数学者も同じだなと思うのです。

フランス人作家フィリップ・ソレルスは「小説と極限の実験」という講演の中で、次のように述べています。

「書くこと、文章に姿をあらわさせること、それは特権的な知識を並べることではない。それは人皆知っているながら、誰ひとり言えずにいることを発見しようとする試みだ」

まさにその通りです。数学者が、偉大な何者かが隠した世界の秘密、いろいろな数字のなかにこめられた、すでにある秘密を探そうとするのと同じように、作家も現実のなかにすでにあるけれども、言葉にされないために気づかれないでいる物語を見つけ出し、鉦石^{こうせき}を掘り起こすようにスコップで一所懸命掘り出して、それに言葉を与えるのです。自分が考えついたわけではなく、実はすでにそこにあつたのだ、というような謙虚な気持ちになったとき、本物の小説が書けるのではないかという気がしています。

作家になるためには想像力、空想の力が必要だと言いますが（もちろんそれが必要なんですけれども）、むしろ現実を見る、観察する、そういう視点も非常に重要になってくると思われます。

（小川洋子の文章による）

注 『博士の愛した数式』…小川洋子の代表的な小説。